

サイコパス特性と攻撃行動との関連に対する 学校ストレスの調整効果

筑波大学人間系 西村 多久磨
筑波大学大学院人間総合科学研究科 村上 達也

The mediating effects of the school stressor toward the relationship between psychopathic traits and aggressive behavior

Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, NISHIMURA, Takuma
Institute of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, MURAKAMI, Tatsuya

要 約

本研究では、子どものサイコパス特性と攻撃行動との関連を検討し、その関連を学校ストレスが調整するかどうかを質問紙調査を用いて検討した。調査対象は、4年生から6年生の330名であり、調査対象者の平均年齢は10.66歳 ($SD=0.96$) であった。階層的重回帰分析の結果、サイコパス特性と外顕性攻撃および関係性攻撃との関連に対して、友人ストレスと教師ストレスによる調整効果が確認され、それらのストレスが高まるとサイコパス特性と攻撃行動の関連が強まること示唆された。以上のことから、サイコパス特性を持っている子どもがいたとしても、その子どもを取り巻く環境を調整することによって、攻撃行動の発現が抑制されることが示された。

【キー・ワード】 サイコパス, 攻撃行動, 学校ストレス, 素因ストレスモデル, 子ども

Abstract

This study examined the mediating effects of school stressor toward relationship between psychopathic traits and aggressive behavior in children through questionnaire survey. The participants were 330 elementary school pupils from the 4th to 6th grade ($M_{age} = 10.66$, $SD = 0.96$). The hierarchical multiple regression analysis revealed the mediating effects of school stressor reducing the risks of expressing the aggressive behavior in children with psychopathic traits. This result indicated importance of environment for children with psychopathic traits..

【Key words】 psychopath, aggressive behavior, school stressor, diathesis-stress model, children

問題と目的

サイコパスとは、情動面、対人関係面、行動面においてそれぞれスペクトラムをなす複合的な成分

から構成される一種の人格障害のことである (Blair, Mitchell, & Blair, 2005 福井訳 2009)。サイコパスは、成人の犯罪や反社会的行動、リスク行動をもたらすパーソナリティ特性として注目され、これまでに多くの研究が行われてきた (Frick & Dickens, 2006)。一方で、臨床現場では、成人のサイコパスの治療は極めて難しいことが報告され (Hart, Krop, & Hare, 1988)、深刻な問題に発展する前に、早期の段階での対応が望ましいと考えられている。また、一般の子どもに見られるサイコパス特性は長期にわたり安定することから (Barry, Barry, Deming, & Lochman, 2008)、上述した諸問題を抱える成人は、子どもの時から、類似した問題を抱えている可能性が高い。このような見解により、近年、子どもを対象としたサイコパスの研究の必要性が指摘されている (Salekin & Lynam, 2010)。

海外の研究ではすでに子どものサイコパス特性と問題行動の一つとして攻撃行動 (攻撃性) との関連が多く報告されている。例えば、Baardewijk, Stegge, Bushman, & Vermiren (2009) は、コンピューターゲームを用いた実験を行い、自己報告によるサイコパス特性と、攻撃性の指標 (対戦相手に与えるノイズの量) との間に正の関連が見られたことを報告している。また、Raine, Dodge, Loeber, Gatzke-Kopp, Lynam, Reynolds, Stouthamer-Loeber, & Liu (2006) や Kimonis, Flick, Fazekas, & Loney (2006)、Baardewijk, Vermeiren, Stegge, & Doreleijers (2011) は、サイコパス特性と能動的攻撃性および反応的攻撃性との間に、正の関連があることを報告している。

一方で、わが国の子どものサイコパスに関する研究は始まったばかりであり (西村・村上, 2014)、学術的なニーズが高まった今日においても、子どものサイコパス特性と攻撃行動との関連についての報告はなされていない。そこで、まず、本研究では、小学生を対象としてサイコパス特性と攻撃行動との関連を検討し、海外の先行研究と同様に正の関連が見られるかどうかを確認する。これを本研究の第一の目的とする。

次に、サイコパス特性と攻撃行動との関連が見られたとしても、いかにして攻撃行動の発現に結び付けないかという教育的視点が重要になる。このような考えに対して有効な視点をもたらすのが素因ストレスモデルである。素因ストレスモデルとは、一定の素因を持つ者が、何らかの要因を受けることによって精神病理症状を発症するという考え方に基づいた臨床モデルである (丹野, 2001)。そこで、本研究では、この素因ストレスモデルに基づき、以下の仮説を立てた。すなわち、サイコパス特性と攻撃行動の関連を想定した上で、学校ストレスが加わると、サイコパス特性が攻撃行動の発現を促進させるという仮説である。すでに、ストレスが高い状態では、不安や不機嫌・怒りといったストレス反応が生起されることが示されており (岡安・由地・高山, 1998)、子どもがストレスを感じ、不安や不機嫌・怒りが高い状態では、サイコパス特性がより攻撃行動に繋がりやすいと考えられる。この仮説の検証を本研究の第二の目的とする。

本研究では子どものサイコパス特性を測定するために、Baardewijk, Andershed, Stegge, Nilsson, Scholte, & Vermeiren (2010) が作成した尺度を用いた。この尺度は、Baardewijk, Stegge, Andershed, Thomaes, Scholte, & Vermeiren (2008) が開発した youth psychopathic traits inventory child version (YPI-CV) の短縮版であり、サイコパスを、誇大・操作 (grandiose-manipulative)、冷淡・非情緒 (callous-unemotional)、衝動・無責任 (impulsive-irresponsible) の三側面によって測定する尺度である。この尺度を用いて、本研究では、サイコパス特性と攻撃行動の関連を確認し、さらに

学校ストレスラーがその関連を強めるかどうかを検証する。

方 法

調査時期と調査対象

2013年11月に千葉県公立小学校1校の4年生から6年生330名に質問紙調査を実施した。内訳は4年生男子40名、女子58名、5年生男子67名、女子62名、6年生男子50名、女子53名であった。調査対象者の平均年齢は10.66歳 ($SD=0.96$) であった。

調査内容

サイコパス特性 Baardewijk et al. (2010) の尺度を翻訳し用いた。この尺度は18項目から構成され、サイコパスの下位カテゴリとされる“誇大・操作”、“冷淡・非情緒”、“衝動・無責任”がそれぞれ6項目によって測定される。4段階評定 (1: まったくあてはまらない, 2: あまりあてはまらない, 3: まあまああてはまる, 4: とてもあてはまる) により回答を求めた。なお、この尺度の使用にあたっては、原著者に連絡をとり、使用および翻訳の許可を得た。

学校ストレスラー 岡安他 (1998) が作成した児童用学校ストレスラー尺度を用いた。この尺度は合計で9項目から成り、以下の三つの下位尺度が、それぞれ3項目によって測定される。それらは、教師ストレスラー (例: 先生が、よくわけを聞いてくれずに、おこった。), 友人ストレスラー (例: 友だちに、いやなあだ名や、わる口を言われた。), 学習ストレスラー (例: じゅぎょう中、わからない問題があてられた。) である。各項目について、4段階評定 (1: ぜんぜんなかった, 2: あまりなかった, 3: ときどきあった, 4: よくあった) による回答を求めた。

攻撃行動 Click & Grotper (1995) を参照し、外顕性攻撃を3項目 (例: 私は、いやな人をよくたたきます), 関係性攻撃を7項目 (例: 私は、いやな人を仲間はずれにします) 用意した。5段階評定 (1: ぜんぜんしなかった, 2: ほとんどしなかった, 3: ときどきした, 4: だいたいいつもした, 5: いつもした) による回答を求めた。

倫理的配慮

質問紙は、児童を対象に学級活動の一部の時間を用いて集団方式で実施された。フェイスシートには、学校の成績に一切関係がないこと、個人のプライバシーは保護されること、アンケートの回答は強制ではないこと、の3点が明記された。また、サイコパス特性については児童の心的負担や社会的望ましさによる回答の歪みが予想されたため、教示文のすぐ後に、この設問に正しい回答は存在しないことを明記し、担任教師に結果を知られることはないということを、改めて明示した。

結 果

尺度の信頼性係数および尺度得点の平均値と標準偏差

本研究で使用する尺度の信頼性を確認するために、Cronbach の α 係数を算出した。その結果、サイコパス特性を測定する尺度に関しては、誇大・操作は $\alpha=.69$ 、冷淡・非情緒は $\alpha=.67$ 、衝動・無責

任は $\alpha=.65$, サイコパス特性全体では, $\alpha=.81$ であった。学校ストレッサーに関しては, 教師ストレッサーは $\alpha=.72$, 友人ストレッサーは $\alpha=.80$, 学習ストレッサーは $\alpha=.64$, 学校ストレッサー全体では, $\alpha=.85$ であった。攻撃行動に関しては, 外顕性攻撃は $\alpha=.90$, 関係性攻撃は $\alpha=.94$ であった。サイコパス特性を測定する尺度および学校ストレッサー尺度については, 一部 α 係数が低いものも見られたが, 先行研究と対応させるために, このまま用いることとした。以下, 加算平均得点を尺度得点として扱った。各尺度の平均値と標準偏差を表 1 に示した。

表 1 本研究で用いた変数の記述統計量と信頼性係数

	件法	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
サイコパス特性				
誇大・操作	4	1.60	0.50	.69
冷淡・非情緒性	4	1.71	0.57	.67
衝動・無責任	4	1.97	0.53	.65
サイコパス特性(全体)	4	1.76	0.42	.81
学校ストレッサー				
教師ストレッサー	4	1.37	0.55	.72
友人ストレッサー	4	1.47	0.66	.80
学習ストレッサー	4	1.99	0.67	.64
学校ストレッサー(全体)	4	1.61	0.48	.85
攻撃行動				
外顕性攻撃	5	1.18	0.53	.90
関係性攻撃	5	1.50	0.77	.94

相関分析の結果：サイコパス特性と攻撃行動との関連の検討

次に, サイコパス特性と攻撃行動との関連を検討するために, 相関分析を行った。その結果, 外顕性攻撃に対して, 誇大・操作は $r=.177$ ($p<.01$), 冷淡・非情緒は $r=.386$ ($p<.01$), 衝動・無責任は $r=.259$ ($p<.01$), サイコパス特性全体は $r=.350$ ($p<.01$) であり, いずれにも正の相関関係が確認された。また, 関係性攻撃に対して, 誇大・操作は $r=.301$ ($p<.01$), 冷淡・非情緒は $r=.414$ ($p<.01$), 衝動・無責任は $r=.387$ ($p<.01$), サイコパス特性全体は $r=.467$ ($p<.01$) であり, 外顕性攻撃と同様に, いずれにも正の相関関係が確認された。表 2 には, 本研究で使用する全ての変数の相関係数を示した。

表 2 変数間の相関係数

変数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1 性	-										
2 年齢	.078	-									
3 誇大・操作	.129 **	.021	-								
4 冷淡・非情緒	.204 **	-.062	.450 **	-							
5 衝動・無責任	.068	.066	.424 **	.473 **	-						
6 サイコパス特性(全体)	.170 **	.008	.770 **	.820 **	.795 **	-					
7 教師ストレス	.091	.141 *	.262 **	.315 **	.283 **	.362 **	-				
8 友人ストレス	.133 *	.175 **	.263 **	.207 **	.290 **	.317 **	.332 **	-			
9 学習ストレス	.062	.000	.213 **	.326 **	.329 **	.366 **	.421 **	.361 **	-		
10 学校ストレス(全体)	.125 *	.135 *	.321 **	.368 **	.396 **	.455 **	.733 **	.755 **	.795 **	-	
11 外顕性攻撃	.156 **	.033	.177 **	.386 **	.259 **	.350 **	.353 **	.349 **	.265 **	.419 **	-
12 関係性攻撃	.134 *	.115 *	.307 **	.414 **	.387 **	.467 **	.497 **	.333 **	.416 **	.538 **	.594 **

注) 性別は男子 = 1, 女子 = 0

* $p < .05$, ** $p < .01$.

階層的重回帰分析の結果：学校ストレスの調整効果の検討

サイコパス特性と攻撃行動との関連を学校ストレスが調整するかどうか検討するために、外顕性攻撃と関係性攻撃を目的変数とする階層的重回帰分析を行った。まず第1ステップで、性と年齢を投入し、続いて第2ステップで、サイコパス特性（誇大・操作、冷淡・非情緒、衝動・無責任）と、学校ストレス（教師ストレス、友人ストレス、学習ストレス）を投入した。そして、第3ステップでは、第2ステップで投入した変数の交互作用項を投入した。結果を表3に示した。なお、交互作用項は両変数の中心化を行った後に、掛け合わせたものを用いた。

表3 階層的重回帰分析の結果

	外顕性攻撃		関係性攻撃	
	<i>b</i>	β	<i>b</i>	β
step 1	$(R^2 = .03^*, \Delta R^2 = .03^*)$		$R^2 = .03^{**}, \Delta R^2 = .03^{**}$	
切片	1.19 **		1.50 **	
性	-0.16 **	-0.15 **	0.19 *	0.13 *
年齢	0.01	0.02	0.08	0.11
step 2	$R^2 = .26^{**}, \Delta R^2 = .24^{**}$		$R^2 = .38^{**}, \Delta R^2 = .35^{**}$	
切片	1.18 **		1.50 **	
性	-0.06	-0.06	0.05	0.03
年齢	-0.01	-0.02	0.05	0.06
誇大・操作	-0.09	-0.09	0.06	0.04
冷淡・非情緒	0.26 **	0.28 **	0.24 **	0.18 **
衝動・無責任	0.03	0.03	0.18 *	0.12 *
教師ストレス	0.19 **	0.19 **	0.41 **	0.29 **
友人ストレス	0.19 **	0.23 **	0.10	0.08
学習ストレス	0.01	0.01	0.18 **	0.15 **
step 3	$R^2 = .36^{**}, \Delta R^2 = .10^{**}$		$R^2 = .44^{**}, \Delta R^2 = .06^{**}$	
切片	1.14 **		1.44 **	
性	-0.04	-0.04	0.04	0.02
年齢	-0.02	-0.03	0.04	0.05
誇大・操作	-0.11	-0.10	0.04	0.03
冷淡・非情緒	0.23 **	0.25 **	0.22 **	0.16 **
衝動・無責任	-0.02	-0.02	0.13	0.09
教師ストレス	0.17 **	0.17 **	0.39 **	0.28 **
友人ストレス	0.13 **	0.16 **	0.03	0.03
学習ストレス	0.05	0.06	0.21 **	0.18 **
誇大・操作 × 教師ストレス	-0.25 *	-0.14 *	-0.29	-0.12
誇大・操作 × 友人ストレス	0.16 *	0.12 *	0.32 **	0.16 **
誇大・操作 × 学習ストレス	-0.07	-0.05	-0.03	-0.02
冷淡・非情緒 × 教師ストレス	0.27 **	0.20 **	0.35 **	0.19 **
冷淡・非情緒 × 友人ストレス	-0.17 *	-0.13 *	-0.23 *	-0.12 *
冷淡・非情緒 × 学習ストレス	0.17 *	0.13 *	0.13	0.07
衝動・無責任 × 教師ストレス	-0.14	-0.10	-0.28	-0.14
衝動・無責任 × 友人ストレス	0.35 **	0.30 **	0.30 **	0.18 **
衝動・無責任 × 学習ストレス	-0.08	-0.06	0.07	0.04

注1) 性別は男子 = 1, 女子 = 0

注2) *b* = 非標準回帰係数, β = 標準回帰係数.

* $p < .05$, ** $p < .01$.

その結果、第3ステップにおいて、外顕性攻撃に対しては、冷淡・非情緒と教師ストレスおよび衝動・無責任と友人ストレスの交互作用が1%水準で有意であった。また、誇大・操作と教師

ストレスおよび友人ストレスの交互作用が 5%水準で有意であり、同様に、冷淡・非情緒と友人ストレスおよび学業ストレスの交互作用も 5%水準で有意であった。関係性攻撃に対しては、誇大・操作と友人ストレスおよび冷淡・非情緒と教師ストレス、衝動・無責任と友人ストレスの交互作用が 1%水準で有意であった。また、冷淡・非情緒と友人ストレスの交互作用が 5%水準で有意であった。

次いで、交互作用の内容を調べるために、それぞれの攻撃行動を目的変数とする回帰方程式に、交互作用が有意だったサイコパス特性と学校ストレスの平均得点±1標準偏差の値をそれぞれ代入した。さらに、単純傾斜の検定を行い、以下の結果が得られた。なお、以下では、紙面の都合により、交互作用が 1%水準で有意であったものだけについて詳細を述べることにする。結果を図 1 と図 2 に示した。

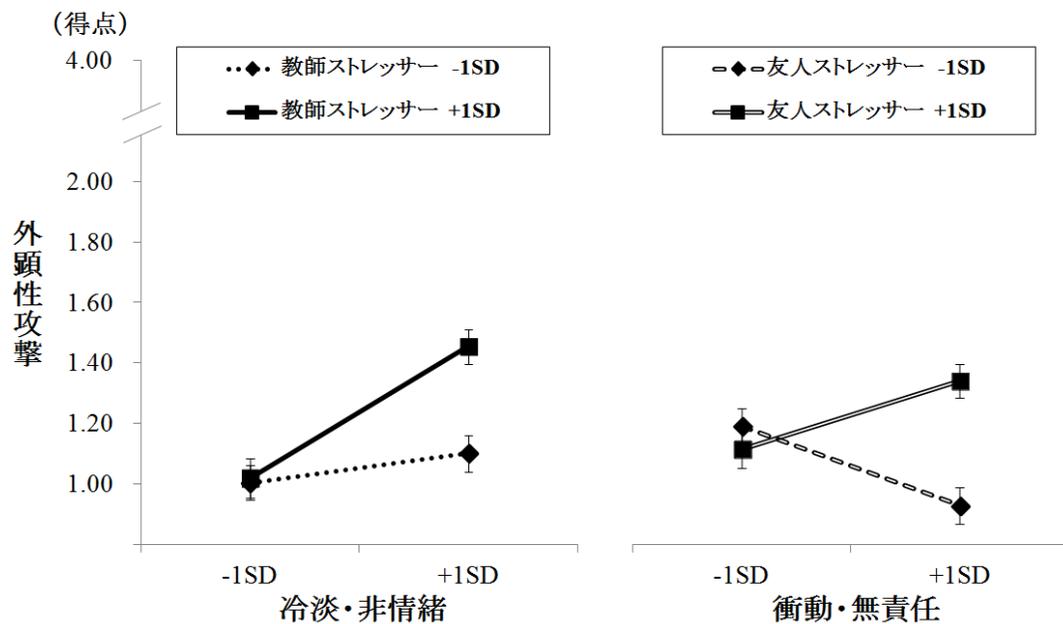


図 1 サイコパス特性と外顕性攻撃との関連に対する学校ストレスの調整効果

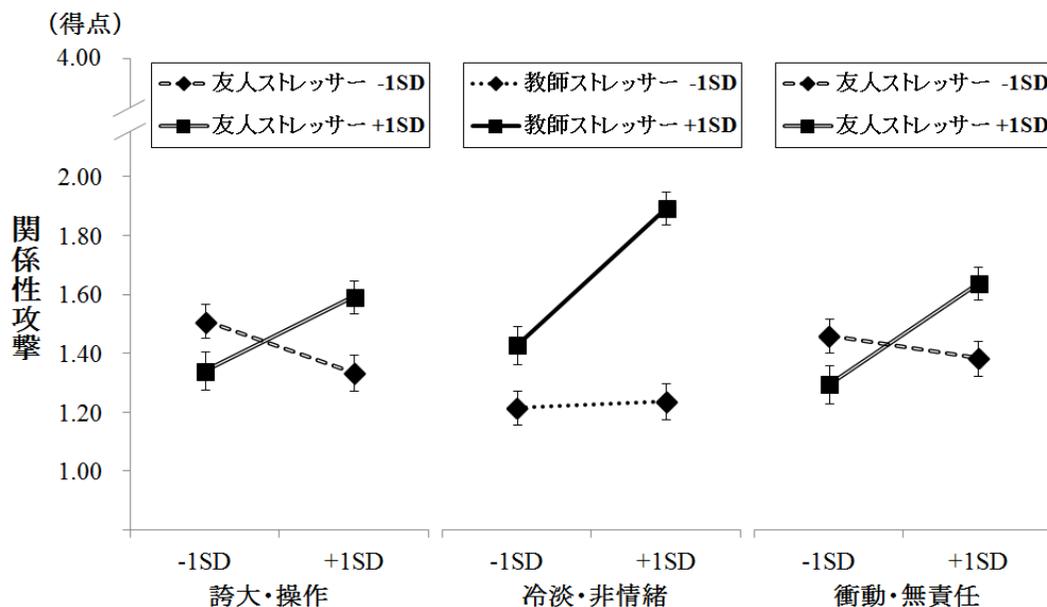


図 2 サイコパステ性と関係性攻撃との関連に対する学校ストレスの調整効果

まず、教師ストレスが低い場合は、冷淡・非情緒を持っていたとしても、外顕性攻撃は促進されないが、教師ストレスが高い場合は、冷淡・非情緒を持っていると外顕性攻撃が促進されることが明らかにされた。また、同様に、友人ストレスが高い場合は、衝動・無責任を持っていた場合に、外顕性攻撃が促進されることも明らかにされた。さらに、友人ストレスが低い場合は、誇大・操作および衝動・無責任が高くても、関係性攻撃は促進されないが、友人ストレスが高い場合に、誇大・操作および衝動・無責任を持っていると関係性攻撃が促進されることが明らかにされた。加えて、教師ストレスが低い場合は、冷淡・非情緒が高くても、関係性攻撃は促進されないが、教師ストレスが高い場合では、冷淡・非情緒が高いと関係性攻撃が促進されることが明らかにされた。以上より、本研究の仮説を支持する結果が得られた。

考 察

本研究の目的は、サイコパステ性と攻撃行動との正の関連を確認し、さらには、その関連に対する学校ストレスによる調整効果を検討することであった。分析の結果、海外の先行研究と同様に、サイコパステ性と攻撃行動の間には正の関連が確認され、そして学校ストレスによる調整効果も示された。これらの調整効果は、いずれもサイコパステ性を持っている場合には、ストレスが加わると攻撃行動が発現されやすくなることを示しており、サイコパステ性の高い子どもに対しては、いかにしてストレスを経験させないかが、重要であることが示唆された。

これまでのストレス研究では、ストレスをどのようにしてストレス反応に結び付けないかが主眼とされてきた。このアプローチの背景には、ストレスを経験しない人などいないという考えが

ある。しかし、ストレスの中には偶発的なものもあれば、対人関係上のトラブルなど、ある程度は、ストレスを受ける側の裁量によって回避することができるものもある。このように考えると、例えば社会的スキルトレーニングなどによって、友達と良好な関係を築く対人スキルを獲得し、ストレスを未然に防いだり、受けにくい状態にしたりすることなどの予防的な視点が、サイコパス特性を持つ子どもに対して極めて重要であるといえよう。

Krueger (2005) は、環境要因によって問題行動の発現リスクを抑えることを目的とした研究の必要性を指摘しており、攻撃行動との関連を弱める他の変数を調べることは臨床的介入を検討する上で極めて重要であるといえる。すでに海外の研究では Baardewijk et al. (2009) は相手の苦痛反応に接触することによって、サイコパス特性と攻撃行動との関連が緩和されることを報告し、共感性を高める介入が有効であると指摘されている。この他にも、例えば、ソーシャルサポートや担任教師との関係性などもサイコパス特性と攻撃行動との結びつきを弱めるかもしれない。今後は、このようなサイコパス特性と攻撃行動との関連を緩和する変数を整理し、サイコパス特性を持つ子どもに対応すべくその介入方法を、またはそれを裏付ける基礎的研究を積み上げていく必要がある。

引用文献

- Baardewijk, Y., Andershed, H., Stegge, H., Nilsson, K. W., Scholte, E., & Vermeiren, R. (2010). Development and tests of short versions of the youth psychopathic traits inventory and the youth psychopathic traits inventory-child version. *European Journal of Psychological Assessment*, **26**, 122-128.
- Baardewijk, Y., Stegge, H., Andershed, H., Thomaes, S., Scholte, E., & Vermeiren, R. (2008). Measuring psychopathic traits in children through self-report. The development of the youth psychopathic traits inventory - child version. *International Journal of Law and Psychiatry*, **31**, 199-209.
- Baardewijk, Y., Stegge, H., Bushman, B. J., & Vermeiren, R. (2009). Psychopathic traits, victim distress and aggression in children. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **50**, 718-725.
- Baardewijk, Y., Vermeiren, R., Stegge, H., & Doreleijers, T. (2011). Self-reported psychopathic traits in children: Their stability and concurrent and prospective association with conduct problems and aggression. *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment*, **33**, 236-245.
- Barry, T. D., Barry, C. T., Deming, A., & Lochman, J. E. (2008). Stability of psychopathic characteristics in childhood: The influence of social relationships. *Criminal Justice and Behavior*, **35**, 244-262.
- Blair, J. Mitchell, D., & Blair, K. (2005). *The psychopath: Emotion and the brain*. Malden, MA: Blackwell. (ブレア, J. ミッチェル, D. ブレア, K. 福井祐輝 (訳) (2009). サイコパス—冷淡な脳—星和書店)
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological

- adjustment. *Child Development*, **66**, 710-722.
- Frick, P. J., & Dickens, C. (2006). Current perspectives on conduct disorder. *Current Psychiatry Reports*, **8**, 59-72.
- Hart, S. D., Kropp, P. R., & Hare, R. D. (1988). Performance of male psychopaths following conditional release from prison. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **56**, 227-232.
- Kimonis, E. R., Frick, P. J., Fazekas, H., & Loney, B. R. (2006). Psychoopathy, aggression, and the processing of emotional stimuli in non-referred girls and boys. *Behavioral Sciences and Law*, **24**, 21-37.
- Krueger, R. F. (2005). Perspectives on the conceptualization of psychopathy. In C. J. Patrick. (Ed.), *Handbook of psychopathy*. New York: Guilford Press. pp. 193-202.
- 西村多久磨・村上達也 (2014). 子どものサイコパス特性と攻撃行動との関連(中間報告) 発達研究, **28**, 161-164.
- 岡安孝弘・由地多恵子・高山巖 (1998). 児童用メンタルヘルス・チェックリスト(簡易版)の作成とその実践的利用 宮崎大学教育学部教育実践研究指導センター研究紀要, **5**, 27-41.
- Raine, A., Dodge, K., Loeber, R., Gatzke-Kopp, L., Lynam, D., Reynolds, C., Stouthamer-Loeber, M., & Liu, J. (2006). The reactive-proactive aggression questionnaire: Differential correlates of reactive and proactive aggression in adolescent boys. *Aggressive Behavior*, **32**, 159-171.
- Salekin, R. T., & Lynam, D. R. (2010). Child and adolescent psychopathy: An introduction. In R. T. Salekin, D. R. Lynam (Eds.), *Handbook of Child & Adolescent Psychopathy*. New York: Guilford Press. pp. 1-12.
- 丹野義彦 (2001). エビデンス臨床心理学 認知行動理論の最前線 日本評論社